

天安門広場と相声「特大新聞」

——「神聖な広場」への「冒瀆」——

弓 削 俊 洋

1. 「神聖な広場」
2. 天安門広場と相声「特大新聞」
 - (1) 「厳肅な儀式」への「冒瀆」
 - (2) 神格化された詩のパロディ
 - (3) 偶像崇拜への嘲笑
 - (4) 「最高会議」を嗤う
 - (5) 何か起きる「予感」
3. 「特大新聞」の作者——姜昆と梁左
 - (1) 「偶然の出会い」から「合作」へ
 - (2) 「虎口遐想」から「特大新聞」へ

1. 「神聖な広場」

北京の中心に位置し、南北 880 メートル、東西 500 メートル、総面積 44 万平方キロ、収容人数は 60 万人に達する、という天安門広場。

この「世界最大の広場」¹⁾は、1949 年に「建国式典」が行われて以来、各種の政治集会やデモ、国賓の歓迎式典など、中華人民共和国の重要な行事の舞台となってきた。

それゆえに天安門広場は、人民共和国の「象徴」とされ、首都北京における最も「神聖」な場所と言われるのだが、こうした位置づけが特に強調されるのは、1989 年「天安門事件」の前後である。

この年の春に起こった「民主化運動」は、天安門広場を主要な舞台として展開された。

これに対し共産党政府は、5月末から、「神聖な広場」への「冒瀆」という立場から民主化運動への批判を強めていき、『人民日報』（党中央機関紙）や『北京日報』（党北京市委員会機関紙）紙上には、「民主の女神」像建設などを非難する文章が立て続けに掲載された。そのなかで繰り返し強調されるのが、「心の中の聖地」²⁾、「莊嚴で厳肅な場所」³⁾、「人民共和国の心臓」⁴⁾、「神聖な場所」⁵⁾といった広場のイメージであった。

そして天安門事件——「血の日曜日」の惨劇も、この「神聖な広場」を「奪還」する過程で引き起こされたのである。

4日午前4時30分、広場「平定」に先立ち、北京市人民政府と戒厳部隊指揮部が流した放送は、次のようなものであった。

天安門広場はわれわれの偉大な祖国の首都北京の中心であり、政治的集会と賓客の歓迎活動を行うわが国の重要な場所であり、また新中国の象徴である。しかしながら、現在の天安門広場は、ごく少数の人間が動乱を引き起こし、デマを伝播させるマーケット（原文：市場）になってしまっている。早急に天安門広場の正常な秩序を回復させるため、（略）直ちに“清場”を実施することを決定した⁶⁾

同日午前5時30分、最期まで残っていた数千人の学生が撤退して広場の「清場」が完了、ここに建国史上空前の規模で展開された民主化運動は終焉の時を迎える。

広場内での死者こそ確認されていないものの、「清場」の前、広場への進入路にあたる長安街などでは、解放軍の無差別発砲によって多数の死傷者を出し、その数は、当事者である共産党政府の発表でさえも3,000人以上にのぼる⁷⁾

当然こうした行為によって、かれらの国内外での威信は大いに損なわれるのだが、そのような犠牲を払ってまでも「奪還」すべき場所、それが天安門広場

であった。

2. 天安門広場と相声「特大新聞」

ソールズベリーは、建国式典当日（1949年10月1日）の広場について、「今日のそれとはかなり様相を異にしていた」と言い、「面積もまだ現在ほど広くはなく、周囲には清朝時代の官庁の低い建物が雑然と立ち並んでいた」、「夜半の雨で早朝の天安門広場は、そこかしこに水たまりとぬかるみができていた」と記している⁸⁾

この「ぬかるみや水たまりだけの狭い広場」はその後、舗装が施されると共に、1955年と77年の二度の拡張工事を経て、「世界最大の広場」となった。

さらに広場内外には、人民英雄記念碑、毛主席記念堂、人民大会堂、中国革命歴史博物館などの巨大な建造物が次々と建設され、「低い建物が雑然と立ち並んでいた」だけの外観を一変させた。

これらの「厳粛で壮大」⁹⁾な建造物——人民共和国の威信をかけて造られ、落成式もメーデーや中共建党建党記念日などに合わせて大々的に举行された記念碑などの存在がまた、天安門広場の象徴性や神聖さをいっそう高める、という役割を果たしている。

相声「特大新聞（ビック・ニュース）」¹⁰⁾は、この「神聖な広場」を「自由市場」に変えてしまう、という漫才である。

うどん屋、八百屋、魚屋、乾物屋、金物屋……さまざまな露店が立ち並び、屋台の湯気と買い物客の人のいきれでむせかえる広場。ネエ負けてよ、負けない、カネ払え、払わない、騙したな、そんなこと知るか……などの嬌声や怒号が飛び交う広場。

と、このように、自由市場に変わった広場の姿とその「効用」を語り、「特大新聞」は、天安門広場に着せられた神聖な衣を一枚一枚剥していく。

(1) 「厳肅な儀式」への「冒瀆」

たとえば広場で行われる国旗掲揚の儀式も、「特大新聞」のなかでは、次のように描かれる。

乙：五星紅旗あげるときに、市場なんか開いて、国旗掲揚の見物は、どないすんねん？

甲：国旗掲揚？ そんなもん見て、何になるんや？

乙：愛国主義の教育、やるんやないかい！

甲：国旗で、何時に上げるんや？

乙：日の出といっしょや。

甲：ほらみい！ 掲揚式見よう思たら、お日さんが出てくるまえに、広場に行かんとあかんやろ。朝飯なんか、食うてる暇ないで。そやけどな、自由市場が、そばにあつてみいや。ほんま、便利やで。出来たての豆腐腦¹¹⁾、ズルズルすすり、五星紅旗、スルスル上がっていくの、見られるんやで。ズルズルすすり、スルスル上がる。ほんま、しびれるわ！

天安門広場は、1949年の建国式典の際、中華人民共和国国旗「五星紅旗」が初めて掲揚された場所である。『新中国大事典』等の資料によれば、毛沢東の建国宣言の後、軍楽隊の演奏と28発の祝砲が鳴り響くなか、人民共和国最初の国旗掲揚が行われたという¹²⁾

このときの場所は定かではないが、現在、国旗掲揚ポールは広場の北端にあつて、衛兵たちによって毎朝掲揚式が行われる¹³⁾

ポールの下は、176平方メートルにわたって囲いがなされ、89年民主化運動のときにも、ここだけは厳重に警備されて、学生達を一歩も立ち入らせなかったそうだ¹⁴⁾「天安門広場が聖なる空間だとすると、そのなかにもう一つの聖なる空間があり」¹⁵⁾ 毎朝そこで神聖な儀式が演じられるわけである。

この「聖なる空間」で行われる儀式について、「特大新聞」は上のように描写し、天安門広場の「神聖」なイメージを貶めるのである。

(2) 神格化された詩のパロディ

「特大新聞」が行う「冒瀆」は、国旗掲揚だけではない。広場内外に聳え立つ建造物、たとえば人民英雄記念碑が、中国革命博物館が、人民大会堂が、次々と笑いのネタにされ、「冒瀆」の対象へと変わっていく。

国旗掲揚ポールの南、広場の中ほどに立っているのが、人民英雄記念碑¹⁶⁾である。

人民共和国の礎——「解放戦争」と「革命戦争」の犠牲者を記念するために建てられたもので、高さ 37.94 メートル(天安門の城楼より 4 メートル高い)、重さ 60 トン、という巨大な碑である。

記念碑の本体は花崗岩と純白の漢白玉¹⁷⁾で造られており、正面に毛沢東の揮毫した「人民英雄永垂不朽」の 8 文字、裏側には周恩来の筆になる碑文 150 字が刻まれている。また台座の側面は、中国革命の節目となる事件とその代表的な人物たちを描いたレリーフで覆われている¹⁸⁾。

記念碑の建立は、建国式典の前日、1949 年 9 月 30 日の第一回政治協商会議で決定され、1958 年 5 月 1 日メーデーの日に落成式が挙行された。

天安門広場を訪れた国賓は、この人民英雄記念碑への献花を済ませたのち、毛主席記念堂の参観を行う、というのが慣習となっている¹⁹⁾。

この慣習は、1989 年 5 月のゴルバチョフ訪中に際しても踏襲されるはずであったが、学生たちのハンストのために中止されてしまった。これが共産党政府の怒りを買ひ、6 月 4 日「天安門事件」の遠因ともなる。「重大な外交行事への妨害」²⁰⁾、「国家の尊厳と形象への侮辱」²¹⁾などが、学生たちに負わされた「罪状」であった。

しかし「特大新聞」では、聖なる記念碑もまたカリカチュアの対象となる。以下に引用したのがその部分であり、作品最大の見せ場ともなっている。

乙：君、もっと考えや。天安門広場、人民英雄記念碑は、厳粛な場所やで。そんなとこに、テント張って、露店出して、値段の駆け引きなんかして、許されると思うか？

甲：ええやないか。あそこは広いし、露店を出すのに、ぴったしや。もの売りの声かて、よう通るで。揚げパン！ でっかい揚げパン！ 記念碑パンは、どうでっか！

乙：そんなん食うたら、齒、ボロボロになるで。

甲：一つ食うて、烈士のみなさんを偲び、二つ食うて、革命の遺志を継ぎ、三つ食うて、……はよ、ゼニ出せや！

乙：めちやくちゃや

甲：めちやくちゃやて？ そりゃ、君、考えが足らんで。これこそ、あの世の「烈士」のみなさんへの、何よりの供養やで。……中国人民は立ち上がり、こんな裕福になった。何を買うにも便利になった。烈士のみなさんが知りはったら、どないに喜びはるか！

乙：なにがなんでも、「自由市場」にするつもりやな。

甲：烈士のみなさんは、「自由」のために、身を捧げたとちがうんか？ この自由市場を見いや。「自由」ばかりやで。そのうえ詩的な雰囲気も、いっぱいや。

「生命はまことに貴し。愛情は更に貴し。しかし自由市場のためならば……」

これ、もうひとつやな。ほなら、ちょっと改作や。

「鶴の卵は高い。アヒルの卵はもっと高い。もしも松花蛋が要るならば、さらに5毛必要だ」。

どや？ この詩シャレとるやろ？

天安門事件直後に書いた文章²²⁾のなかで私は、魯迅の「忘却のための記念」²³⁾に紹介されている詩、

「生命は尊し／愛情はさらに尊し／されど自由のためならば／ふたつながら棄げうつもよし」

を引いて、弾圧の犠牲となった青年達の挽歌とした。

詩の原作者はペテーフィ(1823—49)。ハンガリー独立戦争の序曲となる市民

蜂起で犠牲になった詩人であり、「ハンガリーの愛国詩人」と呼ばれている。²⁴⁾

魯迅の紹介した中国語訳を遺したのは、殷夫(1909—31)。1931年2月、国民党の白色テロに倒れた「左連五烈士」のひとりである。

そのかれの死を悼んで書かれたのが、「忘却のための記念」であり、「魯迅の最も代表的な作品の一つ」²⁵⁾との評価を受けている雑文である。

このような事情から建国後の中国では、この詩を小学校の教科書に掲載したり、小・中学校で魯迅の文章を読ませたりする²⁶⁾など、ペテーフイの詩に対する「神格化」が、共産党政府によって押し進められた。

上掲「特大新聞」からの引用の最後に出てくる「詩」は、この詩のパロディである。

以下にパロディと原作双方を並べてみる。上段が「忘却のための記念」に引用されている中国語訳の原文、中・下段のふたつが「特大新聞」におけるパロディである。

- 生命誠可貴，愛情價更高，若為自由故，二者皆可拋。
- 生命誠可貴，愛情價更高，若為自由市場……。
- 鷄蛋誠可貴，鴨蛋價更高，若買松花蛋，還得掏五毛。

原作の詩の主題は「至上の価値としての自由」ということであろうが、パロディはそれを「自由市場の貴さ」に変え、生命・愛情・自由の比較も、鷄蛋・鴨蛋・松花蛋のそれへと置き換えている。

ふざけた詩ではあるがしかし、原作への「冒瀆」がパロディの目的ではもちろんない。

冒瀆の真の対象は、詩の「神格化」に対しては熱心であっても、肝心の詩のテーマ、「自由の貴さ」を省みない共産党政府であり、かれらの言う自由など、「鷄蛋」「鴨蛋」「松花蛋」と大差なく、「五毛」程度の価値しかない、というのが、パロディに託されたメッセージなのである。

(3) 偶像崇拜への嘲笑

「特大新聞」を読むと、「偶像崇拜」への嘲笑を、作品の重要なテーマとして
いることが分かる。

前記ペテーフィの詩に対するパロディ化がそうであり、同じ引用の前半部分、
「記念碑パン」の場面もまたそうである。記念碑建造の目的は英雄達の自由の
ための闘いを記念し、その遺志を継承する決意を示すためではなかったのか、
かれらを偶像として奉るだけの記念碑であれば、そんなものは「揚げパン」に
して食べた方がまし、という主張が、ここには隠されているからだ。

同様に、次の中国革命博物館の場面にも、偶像崇拜への批判がみられる。

甲：ほんなら、革命歴史博物館はどうや。知つとるやろう？ あそこは前
に、何飾ってた？ 貴重品や！ 毛主席のランプやら、周総理の懐中
時計やら、朱司令の天瓶棒やらが、飾ってあったわな。そやけど今は、
あそこも変わってしもた。

乙：自由市場に、なったんかい？

甲：新式家具の即売会場や！ あっちもこっちも家具ばかりで、ゼニさ
えはろたら、あとは、お持ち帰り自由や。どや、びっくりするやろ？

乙：そんなアホな！

甲：よう聞きや。お持ち帰り自由やし、古うなったら、展示したらええ、
文化財としてな。ただな、偉いさんのモンとちゃうから、引き取って
くれへんかもな……。けったいな話やで！

広場の東側にある中国革命歴史博物館²⁷⁾は、1959年9月19日に完成し、1961
年7月1日、中国共産党の建党記念日に合わせて正式公開された。

中央のホールを挟んで革命博物館と歴史博物館とに分かれており、両館を合
わせた総床面積は6.5万平方メートル、南北313メートル、東西149メートル、
高さは40メートルに達する。

このうち北側部分の革命博物館は、「中国革命と社会主義建設の歴史を宣伝」

するために建てられたもので、4,000平方メートルの展示場には、アヘン戦争後の史料4,500点が展示されている。

引用にでてくる毛沢東、周恩来、朱徳ら人民共和国の元老たちの遺品が展示されているのも、この革命博物館である。

しかし、「特大新聞」は、そんな遺品を見ても一文の得にならない、役に立たない骨董品を展示するくらいなら、いっそのこと家具の即売会場にした方がずっとまし、と言い切り、さらにまた、そもそも元老たちの持ち物だけを後生大事に奉り、庶民のものには見向きもしないのは不公平じゃないか、と不満をならすのである。

(4) 「最高会議」を嗤う

広場の西側にある人民大会堂²⁸⁾には、1万人収容の会議場や5千人規模の宴会が開ける大広間などがあり、日本の国会にあたる全国人民代表大会や、国賓の歓迎セレモニーの会場として使用されている。

「特大新聞」によれば、この大会堂で行われる会議も、自由市場になった天安門広場の恩恵を蒙るという。屋台が近くがあれば、会議中でも簡単に「エネルギーの補給」ができるし、「市場」の話し声や物音から庶民の抱えている問題を知り、すぐさま議題に乗せることだってできるからである。

ではその結果、会議はどうなるのか。作品は次のように描写する。

同志諸君、私の発言は、主に三つの点を……、ワンタンひとつ！ 第一の問題は……、醬油あんまりかけんといてや、薄口が好きやさかい！ 第二の問題は、現在われわれに必要なのは……オイ、大盛にしといて！

あまりに珍妙な発言であるが、しかし現実の会議はこれ以上に荒唐無稽で、意味のない発言が繰り返され、時間だけが空しく過ぎている、というのがここでの主張であり、このような描写を通じて、人民大会堂で行われる会議の「ばかばかしさ」、巨大な入れ物の「空虚さ」も浮き彫りにされるのである。

会議を扱った漫才は他にも例があり、なかでも「会議狂」²⁹⁾は傑作として名高い。1950年代に発表されたこの漫才は、会議で演説することだけが生きがいの下級幹部を主人公にして、無意味・無内容な会議を批判した作品である。

「特大新聞」もこの作品からヒントを得ていると思われるが、「国家の最高権力機関」（中華人民共和国憲法）の議場を舞台にし、そこで行われる会議を笑いのネタにしている点で、「会議狂」より一步踏み込んだ批判を行っていると言える。

(5) 何かが起きる「予感」

以上のように「特大新聞」は、天安門広場が自由市場に変わったら、という設定のもとに、広場とその内外に立つ建造物の「権威」を失墜させ、さらにそうした権威付けを行うモノの「権威」をも貶めようとする作品である。

ただしこのような諷刺を行うにあたっては、「改革開放」という共産党政府の政策を、批判からの逃げ道として用意もしている。

「改革開放」政策の進展で、広場近くにある中南海の毛沢東故居³⁰⁾や天安門の城楼³¹⁾も開放され、お金さえ出せば誰でも参観する事ができるようになった。こんなご時世だから、天安門広場が自由市場に変わることもありえるし、それによって改革開放がここまで「深化」したと天下に知らしめることもできる。

また屋台が立ち並んで活気に溢れる広場を外国人が見たならば、中国も「商品経済」を導入した、これなら安心だ、投資や借款も真剣に検討しよう、と思うだろう。「自由市場」天安門広場は、「投資環境の改善」にも大きく貢献するのだ。

と、「特大新聞」は、国是としての改革開放を逆手にとって諷刺を展開する、したたかな作品でもある。

同時に、カリカチュアやパロディなどを駆使して、次から次へと繰り出される「包袱（ギャグ）」には爆笑が起こったに違いなく、「笑いの芸術」という面からみても、一級品の漫才に仕上がっている。

こういう作品であるので、中国国内での評価も高く、作家の王蒙をはじめ批

評家たちの好評を得ている³²⁾また、『鄧小平最期の闘争』の筆者・江之楓は、1989年春節にテレビでこの漫才を見たと言い、次のような感想を残している。

今年（1989年）の春節バラエティーショーでは、二組の掛け合い漫才師が天安門広場を話題に取り上げたのである。一つは、悪質ブローカーが天安門広場を売ろうとする話、もう一つは、天安門広場を自由市場にしてネギ、野菜、肉などを売ろうという話だった。観衆は当時、早くもなにか変だと感じていた。その時、私も家内に「今年は天安門広場で何か起こるに違いない」と言ったのを覚えている。天安門広場は中国の象徴である。そこでいったい何が起こるのであろう³³⁾

江之楓の「予感」は的中し、この年の天安門広場では大事件が二つも起きた（民主化運動と天安門事件）。そして、かれの言う「天安門広場を自由市場にしてネギ、野菜、肉などを売ろう」という漫才が、「特大新聞」を指しているのは間違いない。

あまりにできすぎた話ではある。しかし、本当に「予感」を口にしたのか、などと詮索するのが引用の目的ではない。注目したいのは、「何か変だ」と感じさせ、「何か起こるに違いない」と言わせるに足る作品として「特大新聞」が持ち出されている、という事実であり、ここから作品のもたらした反響の大きさも窺えるのである。

3. 「特大新聞」の作者——姜昆と梁左

(1) 「偶然の出会い」から「合作」へ

「特大新聞」は、姜昆³⁴⁾と梁左³⁵⁾のふたりで書き上げた作品である。

このうち姜昆は、1970年代後半の「漫才ブーム」³⁶⁾のなかでデビューし、自作自演の話題作「如此照像」や「詩、歌与愛情」などで一躍人気者になった漫才師である。

台本のおもしろさに加えて、「エネルギーで洗練された」³⁷⁾ 舞台や、「やんちゃないたずら坊主」³⁸⁾ を思わせる風貌なども愛されて、1985年に行われた漫才師人気投票³⁹⁾ では、「漫才天元」馬季⁴⁰⁾ に次ぐ票を得ている。

また同じ年には、35歳の若さで、芸人たちの全国組織⁴¹⁾ の副主席にも抜擢され、漫才界の若きリーダーとしての地位を築いた。

しかし爆発的な人気と異常に早い「出世」は、大きな負担と悩みを姜昆にもたらしたようだ。1980年代後半に入り、漫才界が深刻な「低迷状態」に陥る⁴²⁾ なか、姜昆もまた自分の進むべき道を見失ってしまうからだ。以下は、この頃についての回想である。

それ以前に私は数十本の漫才を書き、その多くは好評を得ることができた。しかしこれに伴って、社会活動や行政工作に追い回されることとなり、おまけに長い間コンビを組んできた季文華先生も病気で引退してしまった。その一方で、私に対するファンの期待や要求はますます高くなるのだ。いままでの自分を越えて、新たな一步を踏み出そう、わたしは心からそう思った。しかしどうすることもできずに、ただ呆然とするばかりだったのである⁴³⁾

このような不振に姜昆があえいでいたころ、「特大新聞」のもうひとりの作者梁左は、外国語大学で留学生相手に中国語を教えるかたわら、「まったく反応のない」⁴⁴⁾ 小説を書き続けていた。有名な女流作家謹容⁴⁵⁾ の息子として生まれ、北京大学在学中から小説を書き始めていた、というかれにとっても、当時の生活は決して満足できるものではなかった。

スランプに悩む漫才師と売れない「新人作家」、こんなふたりが出会い、「合作」を始めるようになるのは、まったくの「偶然の機会」からであったという。

1986年夏、わたし（姜昆）は謹容先生を訪ねた。その時たまたま家にいた梁左が、書き終えたばかりの小説について話をしてくれた。かれの話を

聞いてわたしは、この作品は絶妙な漫才であり、そのまま舞台にかけてもいいぐらいだ、と思った。そこで原稿を預かり、巡業先の広州に向かう列車の中で漫才の台本に仕上げたのである⁴⁶⁾

これが1987年の春節に上演され大きな反響を呼んだ「虎口遐想」であり、梁左の小説を姜昆が漫才にする⁴⁷⁾というスタイルの目新しさも手伝って、ふたりの「合作」はこれ以後、漫才界の注目を浴びることとなる⁴⁸⁾

(2) 「虎口遐想」から「特大新聞」へ

かれらの出世作「虎口遐想（絶体絶命）」は、動物園に遊びに行った男が、トラを放し飼いにしている穴に誤って落ちる、という話であり、慌てふためく男と無責任な野次馬たちの対比を軸に、かれらの交わす会話や、野次馬たちの考える「救援策」の滑稽さを見所にしている。

「特大新聞」との関連で言えば、「雷鋒学習運動」に触れる、以下の部分に注目したい。

政治スローガンを唱和して、トラを撃退しようとする野次馬たちに向かって、男が怒鳴りつける場面である。

甲：オーイ、上の人、上の人！ 虎にスローガン叫んでも分かるわけないやろ！ あんたら雷鋒精神を勉強したんかいな？ ほんまに勉強したんやったら、ここまで降りてこいや！

乙：人をまきぞえにするつもりか？

甲：共産黨員やったら、降りてこんかい！

雷鋒（1940—62）は、「毛沢東の立派な戦士」になり、「永遠に党と人民に尽くす」ことを人生の目標にし、1962年に殉死した共産黨員である。

かれの死後、「雷鋒同志に学ぼう」というスローガンが毛沢東によって提出され、1963年には全国的な学習運動にまで発展していった。以後この運動は、共

産党政府の進める思想教育の「目玉商品」として繰り返し行われており、1990年にも江沢民、楊尚昆、李鵬らが音頭をとって大々的に展開された⁴⁹⁾

「虎口避想」は、この「雷鋒学習運動」を取り上げ、それが現実の社会では大した成果を上げていないと皮肉り、さらに運動を発動する共産党こそがもっとも「雷鋒精神」に欠けていると当てこするのである。

この作品以後、姜昆と梁左の発表した漫才は20本以上にのぼるが⁵⁰⁾、そのなかでもしばしば、中国社会に蔓延する問題、党政府の腐敗や無策ぶりが話題となる。

たとえば、賄賂やコネを使って出世し、「海外視察」の名目で家族旅行を楽しむ幹部を登場させる作品⁵¹⁾ 人命よりも手続きや会議を優先して、保身を図る役人を描いた作品⁵²⁾ さらに「美人の定義は変えられないのに、どうして物の値段だけはすぐ変えることができるんだ」と嘯く作品⁵³⁾などを、その例として挙げるができる。

姜昆たちの漫才は、このような諷刺を大きな特徴としており、「特大新聞」はその集大成と言うべき作品なのである。 (1995年4月)

註釈

- 1) ピーター・マシューズ著／大出健訳『ギネスブック'95』(騎虎書房 1994年11月22日) p.196。
- 2) 「天安門広場啊、我為你哭泣」(『北京日報』1989年6月1日)。
- 3) 「天安門管理所声明 反対在広場設什麼“女神”像」(『人民日報』1989年5月31日)。
- 4) 靳仁「神聖の天安門広場不容褻瀆」(『人民日報』1989年6月2日)
- 5) 吳葉「天安門広場出現“民主之神”像意味着什麼」(『人民日報』1989年6月1日)
- 6) 「戒嚴部隊指揮部發言人称戒嚴部隊平息反革命暴乱進駐天安門」(『人民日報』1989年6月5日)。引用は、矢吹晋編『チャイナ・クライシス重要文献 第3巻』(蒼蒼社 1989年12月10日) p.151より。
- 7) 「軍人以外の者3,000余人が負傷し、36名の大学生を含む200余人が死亡」(陳希同「関于制止動乱和平息反革命暴乱的情況報告」6月30日 『人民日報』1989年7月7日)。
- 8) ハリソン・E・ソールズベリー著／三宅真理・NHK取材班訳『天安門に立つ 新中国の40年』(日本放送出版協会 1989年9月30日) p.32, p.36。なお同書には、建国式典に集

まった群衆は、「20万から30万」とある。これも当時の広場の「狭さ」と関係すると考えられる。

9) 王永平主編『新中国大事典』(中国国際広播出版社 1992年11月) p.165, p.166。

10) 姜昆・梁左作の漫才(相声)。1989年の春節に、姜昆・唐傑忠のコンビで上演され話題となった。台本は、『虎口遐想——姜昆梁左相声集』(文化芸術出版社 1992年7月)に収録。なお、唐傑忠は1932年生まれ、漫才師で、ボケ役(捧哏)として有名。

本文で検討した諷刺性以外の特徴をひとつだけ挙げれば、この作品は「子母哏」型の漫才(相声)である。子母哏とは、二人の漫才師の議論・論争によって話が展開されるタイプの漫才を指す。これに対し主に一人が喋り、他の一人は相づちを打ったり、ちょっとちゃかしたりするだけ、というタイプの漫才を「一頭沈」と言い、多くの作品がこの型に属す(3章の「虎口遐想」も「一頭沈」型の漫才)。

11) 豆腐腦：ダイズ汁を煮つめて半固形にし、調味料をかけて食べる。(大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典④』角川書店1994年3月10日 p.764)

12) 註9『新中国大事典』p.4「中華人民共和國開国大典」による。

13) 国旗昇降の儀式を行うのは、中華人民共和國国旗護衛隊(前身は中国人民武装警察隊天安門中隊国旗班)。護衛隊は、36名の武装兵からなり、国旗奉持手1名、昇降旗手2名、引率官1名、護衛兵32名という構成。平日は国歌の録音テープを流すだけだが、祝日と毎日1日、11日、21日には60名の軍楽隊が出勤して掲揚式が行われる。なお掲揚される国旗は、縦3メートル、横5メートルの中国最大の五星紅旗である。以上、時新徳写真・文「国旗掲揚3000回」(『人民中国』1995年4月号)

14) 竹内実「天安門広場」(『読売新聞』[大阪本社版]1989年8月21日夕刊。のち竹内実編著『中国を読むキーワード』に所収 蒼蒼社 1990年5月15日)

15) 同前

16) 記念碑の説明は、註9『新中国大事典』p.143-144「人民英雄記念碑落成」によった。

17) 漢白玉：大理石に似た白色の石材。河北省房山特産。註11『中国語大辞典④』p.1208。

18) 「武昌蜂起」「五四愛国運動」など10の運動と、英雄人物200人余りが描かれている。註9『新中国大事典』p.144。

19) 辻康吾他編『最新中国情報辞典』(小学館 1985年1月18日) p.715「天安門広場」。

20) 「李錫銘關於北京学潮情况的通報」(何芝州編著『血沃中華——89年北京学潮資料集』香港新一代文化協會 1989年10月)。

21) 註3「天安門管理所声明 反対在広場設什麼“女神”像」

22) 拙稿「6月4日」(『愛媛新聞』「四季録」1989年6月15日)

23) 魯迅「為了忘却的記念」(『現代』2-6 1933年4月1日。のち、『南腔北調集』上海同文書

- 店 1934年3月初版に収録)。引用は、『魯迅全集④』(人民文学出版社1981年)より。
- 24) 前掲『魯迅全集④』注釈。詩人の経歴は、『新潮世界文学辞典』(増補改訂版 新潮社 1990年4月20日)による。
- 25) 増田渉・松枝茂夫訳『魯迅選集 第9集』「解説」(岩波書店 1956年11月22日初版 73年5月10日第4刷)
- 26) 串田久治著『天安門落書』(講談社現代新書998 1990年5月20日) p.151。なお同書によれば、こうした教育の結果、ペテーフイの詩は、「建国後の中国で教育を受けた者は、誰でもこの詩をそらんじている」ほど有名になり、1989年の民主化運動の「ハンスト宣言」でも引用された。
- 27) 革命博物館の説明は、同博物館発行の案内書および、註9『新中国大事典』p.165-166「中国革命博物館和中国歴史博物館建成」による。
- 28) 人民大会堂の概要は、註9『新中国大事典』p.166-167「北京人民大会堂建成」による。
- 29) 何選作「開会迷」(1955年)。詳細は拙稿「相声『開会迷』と雑誌『人民文学』」(『野草』38号 1986年9月10日)を参照されたい。
- 30) 毛沢東故居は、1978年末の三中全会後、「内部開放(部内者への開放)」され、上京した会議参加者などの団体での参観が許されるようになった。以上、註19『最新中国情報辞典』p.963「中南海」による。
- 31) 天安門城楼は、1988年1月1日より正式開放された。初年度は約60万人(うち外国人9万人)が城楼に登り、800万人民币(外貨兌換券が3分の1)の参観収入があった。参観料は中国人10元、外国人30元、開放時間は9:00~17:00(入場は16:30まで)。註9『新中国大事典』p.548「天安門城楼向中外游人開放」による。
- 32) 王蒙『虎口遐想——姜昆梁左相声集』(文化芸術出版社 1992年7月)「序文」、汪景寿・藤田香『相声芸術論』(北京大学出版社 1992年8月)第12章「文人作家」、赫景秀「梁左和和的相声創作」(『文芸報』1992年3期)など。
- ただし、これらの評論は、「発想の奇抜さ」や「荒唐無稽な設定」の面白さを褒めるだけで、そこに隠された辛辣な諷刺にまで踏み込んで評価しようというものではない。いずれも天安門事件後の評論であるため、「神聖な広場への冒瀆」という視点で、「特大新聞」を論ずることは憚られたのであろう。
- 33) 江之楓著・戸張東夫訳『インサイド・ドキュメント 鄧小平最期の闘争』(徳間書店1990年6月3日)「思いにふける鄧小平——1989年4月16日」p.41。なお、もうひとつの漫才が何であるのかは不明。
- 34) 姜昆(1950年生)。1968年、黒竜江生産建設兵団に「下放」、1976年9月、馬季の推薦で中央広播文工団説唱団に入団し、プロの漫才師となる。78年、名ボケ役の李文華とコンビを

結成、「如此照像」「詩、歌と愛情」などを演じて注目される。1980年に「如此照像」が全国優秀相声作品コンクールで最優秀賞を受賞するなど、人気を不動のものとする。85年、病氣引退した李文華にかわり、唐傑忠とコンビを組み、87年春節に「虎口遐想」を演じて話題となる。現在は、中国曲芸家協会副主席、中国広播芸術団説歌唱隊長。

- 35) 梁左（1957年生）。1982年に北京大学中文系を卒業、北京語言学院对外漢語教学センター、国家教育委員会を経て、現在は中国芸術研究院曲芸研究所に勤務。
- 36) 1970年代後半の漫オブームは、1976年10月発表の「帽子工場」（常宝華・常貴田作）に端を発し、1980年まで続いた。その間、「特殊生活」「如此照像」「霸王別姫」「不正之風」などの話題作と、姜昆（註34）、師勝傑（1953年生）、趙炎（1952生）などの才能ある新人を世に送り出した。
- 37) 薛宝琨『中国的相声』（人民出版社 1985年6月）p.173。
- 38) 『姜昆相声選①』（中国唱片公司 1992年）「解説」。
- 39) 1985年末、ファンの投票によって「十大笑星（漫才師ベストテン）」を選ぶコンクールが行われた。11万の投票が寄せられ、馬季、姜昆、李文華、候躍文、趙炎、師勝傑、赫愛民、常宝華、石富寬、高英培の10人が選出された。主催は、吉林省曲協・ラジオ局・テレビ局など5単位。基本資料としては、実況テープ『十大笑星声集①～⑩』（中国唱片上海分公司 1986～87年）がある。
- 40) 馬季（1934年生）。1956年、書店店員から漫才師に転じ、「天才」候宝林（1917—93）の後継者と目されるようになった。代表演目として「英雄小八路」「舞台風雷」などがある。
- 41) 中国曲芸家協会（曲協）。芸能人の団結と交流、創作・上演・研究活動と国際交流の促進を目的にした全国組織。（上海辞書出版社『中国 戯曲曲芸詞典』1981年9月p.771）。
1958年8月に成立し、初代主席は作家の趙樹理。1979年11月に第二回大会、85年4月に第三回大会が開催された。天安門事件の翌年1990年には、羅揚（曲協副主席・常務書記）を責任者とする「党組」が置かれ、共産党の「指導」が強化された（『曲芸』1990年10月号）。
- 42) 1980年代になって中国漫才は低迷期に入り、80年代後半からは「相声の危機」が指摘されるまでになった（註32『相声芸術論』17章、『曲芸』91年7月号掲載「相声的根本出路」などによる）。そのため廃業する漫才師が相次いでいるとも言われている（『曲芸』1994年1月号掲載「説幾句心理話」）。
- 43) 姜昆「関于梁左」（註32『姜昆梁左作品集』所収）
- 44) 梁左「従小説到漫才」（『曲芸』1988年6月号）
- 45) 梁左の母謹容（1936年生）は、映画化もされた『人到中年』（80年）で知られる女流作家である。父は『人民日報』記者で全国政治協商会議委員、弟（梁天）は俳優、妻はキリスト

教女子青年会の仕事をしている。

46) 註 43 「関于梁左」。

47) 梁左によれば、かれらの作品の大部分は、梁左の書いた小説を姜昆が漫才に直す、という形で作られた。例外的に梁左が直接漫才台本を書いた作品もあるが、出来がよくなかった、とも言っている。(註 44 「従小説到着漫才」)

48) 芸能専門誌『曲芸』のほか、『人民文学』や『文芸報』などにも台本や批評が掲載され、作家で元文化相の王蒙が作品集に序文を寄せるなど、ふたりの仕事は文芸界の注目を浴びることになった。

49) 註 9 『新中国事典』p.196 「学習雷鋒活動在全国展開」による。

50) 『虎口遐想——姜昆梁左相声集』(文化芸術出版社 1992年7月)には以下の作品が収録されている。①虎口遐想 ②自我選擇 ③大美人 ④電梯奇遇 ⑤家庭怪事 ⑥是我不是我 ⑦学説話 ⑧老人与時代 ⑨捕風捉影 ⑩火葬指標 ⑪処長上台 ⑫特大新聞 ⑬合家歡 ⑭学唱歌 ⑮家庭喜劇 ⑯天仙配 ⑰小偷公司 ⑱聚会 ⑲美麗暢想曲 ⑳着急

このほか「侯大明白」(梁左・姜昆・侯耀文作)を、『曲芸』1993年6月号に掲載。

51) 「小偷公司」(前掲作品集に収録)

52) 「電梯奇遇」(『曲芸』1988年5月号掲載, 前掲作品集に収録)

53) 「美人定義」(『人民文学』1989年8月号掲載, 前掲作品集に収録)

附記 本稿は平成6年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)に基づく研究成果の一部である。